

第3節 目久美遺跡における縄文時代晩期末から弥生時代前期の土器について —県内資料との比較から—

1. はじめに

鳥取県下の縄文時代晩期末から弥生時代前期の土器については、一括資料が少なく、その様相は曖昧である。そのうち弥生時代前期の土器については、段から削出突帯、そして貼付突帯という変化を前提にした清水真一氏による編年がある¹⁾。一方、突帯文土器についてはほとんど体系的な整理がなされていない。このような状況下で、長瀬高浜遺跡、イキス遺跡の突帯文土器が弥生前期土器に伴うものであるとした土井珠美氏の指摘は重要である²⁾。

目久美遺跡第5次、第6次調査では、包含層中から、いわゆる遠賀川系土器と突帯文土器が出土した。遺構内出土の一括資料ではないが、包含層出土資料としては良好で、ほぼ弥生時代前期中葉の土器の在り方を把握できるものと思われる。ここでは、突帯文土器を中心に検討をすすめ、特に、前期土器に伴う突帯文土器の型式学的特徴を抽出し³⁾、さらに、当該地域の特性について簡単にまとめたい。

2. 目久美遺跡第5次・6次調査出土資料について

a 第5次調査出土資料

i. 器種構成

弥生時代前期の包含層から出土した土器には、遠賀川系土器と突帯文土器、そして粗製土器がある。個体数を口縁部片から算出すると、総個体数139点のうち、遠賀川系土器12点（9%）、突帯文土器・粗製土器127点（91%）である。遠賀川系土器の内訳は、壺4点（3%）、甕5点（3.5%）、鉢・浅鉢2点（1.5%）、高坏1点（1%）、突帯文土器は壺7点（5%）、甕94点（67.5%）、その他7点（5%）、粗製土器が19点（13.5%）である。

ii. 遠賀川系土器

壺（第3章第11図2～5）

胴部まで復元できるものではなく、頸部まで判るものが僅かあるにすぎない。いずれも中型品で、口頸部が判るものについては、いずれも口頸部界は段による区画（2、3）で、3については、沈線で区画した後、下側をやや低めているように思われる。第5次調査出土の壺には、削出突帯は認められない。また、文様が施されたものや彩色されたものも確認できなかった。

甕（第3章第11図9～13）

壺同様、胴部下位まで復元できるものは皆無である。形態は、おそらく倒鐘形を呈すものと思われ、口縁部はいずれも如意形におさまる。調整はナデ調整が主で、刷毛目が施されたり、刷毛目後ナデ調整がされるものがある。断面で接合痕が認められるものについては、外傾接合である。9、10は口縁端部に刻目が施される。また、10は頸胴部に2条の沈線、11は低い段が形成されている。胴部上半に山形文や刺突文等の文様が施されたものは確認できなかった。

鉢・浅鉢（第3章第11図6、7）

同じく全形を復元できるものはない。6の口縁部は如意形を呈す。7は肩部で屈曲する形態を呈す。

高坏（第3章第11図8）

脚部と思われるものが1点出土した。薄い作りで、比較的小型と思われる。

iii. 突帯文土器

甕

刻目の有無で、刻目突帯文土器と無刻目突帯文土器に大別し、さらに突帯の数で一条突帯と二条突帯に分けることができる。しかし、二条突帯と思われる土器片は1点（第12図38）しか認められないと、ここでは一条突

帶文土器をあつかう。また、全形が窺える資料は少なく、口縁部を中心に分類する。口縁部の形態は、口縁端部の形状と突帯の位置から、次のように細分される。

器面調整については、外面調整には粗い擦痕の残るナデ調整(図版16-26参照)、ナデ調整が主体を占め、二枚貝条痕が少量認められる。内面については、ナデ調整が丁寧に施される場合が多いが、希に二枚貝条痕が認められる。また、調整が丁寧なため断面に接合痕が明瞭に残るものは少ないが、外傾接合は1点も確認できなかった。

刻目突帯文土器Ⅰ類 (第3章第12図14~21)

口縁端部から下がった位置に突帯がつく。口縁端部は丸くおさめられたり、やや尖形を呈す。刻目はD字、O字、V字等が施される。

刻目突帯文土器Ⅱ類 (第3章第12図22~29)

口縁端部に接するか、やや下がった位置に突帯がつく。口縁の調整と突帯の貼り付けが同時処理される類である。22や28は比較的しっかりとしたD字やV字状の刻目、その他は、V字状に浅く刻まれる。

刻目突帯文土器Ⅲ類 (第3章第12図30~36)

口縁端部から下がった位置に突帯がつき、口縁部は内面を強くナデるものがあり、やや外反気味である。ヘラ状工具で、V字に加え、突帯を斜めに軽く切り込んだような刻目がある。

刻目突帯文土器Ⅳ類 (第3章第12図37)

Ⅲ類よりもさらに下がった位置に突帯がつく。小O字状の刻目が施される。

無刻目突帯文土器Ⅰ類 (第3章第13図39~55)

口縁端部の調整と突帯の貼り付けが同時に処理され、口縁端部に接するか、やや下がって突帯がつくもの。突帯の断面形は下さがり三角形を呈すものが多い。

無刻目突帯文土器Ⅱ類 (第3章第14図56~89)

口縁端部より突帯の幅ひとつ分ほど下がった位置に突帯がつくもの。突帯の断面形には、三角形や下さがりの三角形がある。

無刻目突帯文土器Ⅲ類 (第3章第15図90~100)

口縁端部より突帯の幅ひとつ分ほど下がった位置に突帯がつく点ではⅡ類と同様であるが、口縁部が緩やかに外反もしくは屈曲するもの。突帯の断面形は三角形、下さがりの三角形に加え、扁平な三角形も認められる。

無刻目突帯文土器Ⅳ類 (第3章第 類101~107)

口縁端部より突帯の幅ひとつ以上下がった位置に突帯がつくものを一括した。突帯の断面形は三角形が主体となる。

壺

小片ばかりではあるが、壺形を呈すと思われるものが7点認められる。肩部まで残るものはない。甕としたものの中にも、本来は壺形を呈す土器片が含まれている可能性は否定できない⁴⁾。壺は器形から2大別できる。また、突帯の位置からさらに細分可能である。

壺Ⅰa類 (第3章第15図108)

外反気味の口縁で、おそらく肩の張る胴部につながると思われる類。口縁端部に接して突帯がつくものをⅠa類とした。

壺Ⅰb類 (第3章第15図109~112)

外反気味の口縁で、おそらく肩の張る胴部につながると思われる類。口縁端部から下がった位置に突帯がつくものをⅠb類とした。

壺Ⅱ類 (第3章第15図113、114)

外反する口縁が内傾気味にたちあがる類。

その他 (第3章第16図115~121)

先の分類に当てはまらないものを一括した。遠賀川系土器との折衷形(119)、貼付円盤文のつく異形の突帯文

土器（118）、面取りした口縁端部をもつ突帯文土器（117）等がある。116は遠賀川系土器（如意形口縁）との折衷と考えられる。

iii. 粗製土器（第3章第17図122～125、第3章第18図126～139）

無文の粗製土器が遠賀川系土器や突帯文土器とともに出土している。深鉢ないし鉢形を呈すと思われる土器である。器面調整などは、突帯文土器と共通する部分が多く、外面調整には擦痕の残るナデ調整が多用されている。内面はナデ調整されるものが多い。大型（122～125）と中・小型（126～139）に大別できる。接合痕の観察できるものについては内傾接合のようである。基本的な作りは突帯文土器と共通する。

b 第6次調査出土資料

i. 器種構成

弥生時代前期の包含層（第13層）から出土した土器には、遠賀川系土器と突帯文土器、そして粗製土器がある。個体数を口縁部片から算出すると総個体数は39点で、遠賀川系土器16点（41%）、突帯文土器・粗製土器23点（59%）である。遠賀川系土器の内訳は、壺5点（13%）、甕9点（23%）、高坏1点（2.5%）、浅鉢1点（2.5%）ということになる。突帯文土器は壺1点（2.5%）、甕12（31%）。さらに粗製の甕や鉢が10点（25.5%）である。

ii. 遠賀川系土器

壺（第4章第49図5～9）

5については口頸部界に、6は頸胴部界に段が施される。8には木葉文、9には山形文が描かれている。

甕（第4章第50図13～21）

いずれも形態は倒鐘形を呈すと思われ、口縁部は如意形におさまるものばかりである。口縁端部に刻目があるものとないものがある。口径約19cm～26cmほどの中型品が主体を占める。頸胴部に段が施される15、1条沈線の16、17、2条の沈線と沈線間に刺突が施される18、4条沈線の19、さらに刺突文が加わる25、山形文が施される21がある。刷毛目調整とナデ調整、さらに刷毛目を施した後、ナデ調整を行っているものもある。断面で接合痕の確認ができるものについては外傾接合である。

高坏（第4章第49図12）

脚部が出土している。脚部は太く丸い棒状で、縦方向にひかれた2本沈線が脚部の4方向に施されている。

浅鉢（第4章第49図10）

口縁部が屈曲し逆く字状を呈す浅鉢が1点、これには赤色顔料が塗布されている。⁵⁾

iii. 突帯文土器

すべてが無刻目突帯文土器である。調整は、粗い擦痕の残るナデ調整、ナデ調整が主体的である。第5次調査でみられた二枚貝条痕は認められない。断面に接合痕が明瞭に観察できるものは少ないが、外傾接合は確認できない。

甕

無刻目突帯I類（第4章第51図22、23）

口縁端部に接して断面下さがりの三角形ないし、断面三角形の突帯がつく類。

無刻目突帯文土器II類（第4章第51図24～33）

口縁端部から突帯の幅ひとつ分程度下がった位置に突帯がつく類。突帯の断面形は三角形が主体を占める。

壺I類（第4章第51図34）

34がこれにあたる。口縁端部にほぼ接して断面丸形の突帯がめぐる。

iv. 粗製土器（第4章第51図35～44）

甕ないし鉢形を呈すと思われる土器である。器面調整などは、突帯文土器と共通する部分が多く、外面調整には擦痕の残るナデ調整が多用されている。内面はナデ調整されるものが多い。大型品は認められない。

c 小結

以上、第5次調査、第6次調査で弥生時代前期の堆積層から出土した土器を概観した。小結として、それらの時間的な位置づけについて若干整理しておきたい。ただ、資料の多数を占める突帯文土器については、次に県内資料との比較から検討していきたい。ここでは、両調査で出土した遠賀川系土器についてみておく。

両調査で出土した遠賀川系土器は、口頸部、頸胴部界に段をもつ壺の存在、甕には数条の沈線が頸部下にひかれたものがあるなど、土器の形態的な特徴から大枠で前期中葉に比定できる資料である。しかし、これらの出土状況は、2次堆積であり、これらをもって一括資料とするには問題があろう。型式的にある程度のまとまりを看取できるが、消極的な立場をとり、やや時間幅をもつ可能性を前提に話をすすめる。

近年、岡山県側では、南溝手遺跡、窪木遺跡などの一連の調査により、いっそう前期土器の様相が明らかになってきた。特に、豊富な遺構一括資料は、遺構の切り合い関係により、型式学的見地から推定されてきた変遷を立証することを可能としている⁶⁾。そこで、南溝手・窪木編年を参考に目久美遺跡第5次・6次調査出土資料を比較してみたい。

第5次調査出土資料は、口頸部界に段ないし沈線条の段をもつ壺、頸部下に段をもつ甕に、2条の沈線が施された甕が伴っている状況である。これは南溝手・窪木IIa期に相当すると考えられる。一方第6次調査出土資料は、口頸部界、胴頸部界に段をもつ壺と、段、1~4条の沈線、刺突紋が施された甕という内容である。第5次調査と比較すると、こちらの方が時間幅をもっていると思われ、南溝手・窪木編年ではIII期に近い内容といえる。第6次調査では、削出突帯は出土していないが、西に約十数m離れた第4次調査地点には削出突帯も含まれている。第6次調査の堆積は第4次調査地点から延びる堆積で一連のものである。このように、両調査を比較すると、両調査、両地点の間には、若干の時間差が認められ、第6次調査の方が第4章第50図19や20のような新相を示す資料を含んでいる。次に県内の突帯文土器資料を整理し、目久美遺跡の突帯文土器の時間的位置について検討し、遠賀川系土器と突帯文土器の在り方について考えてみたい。

2. 県下の突帯文土器（第1図）

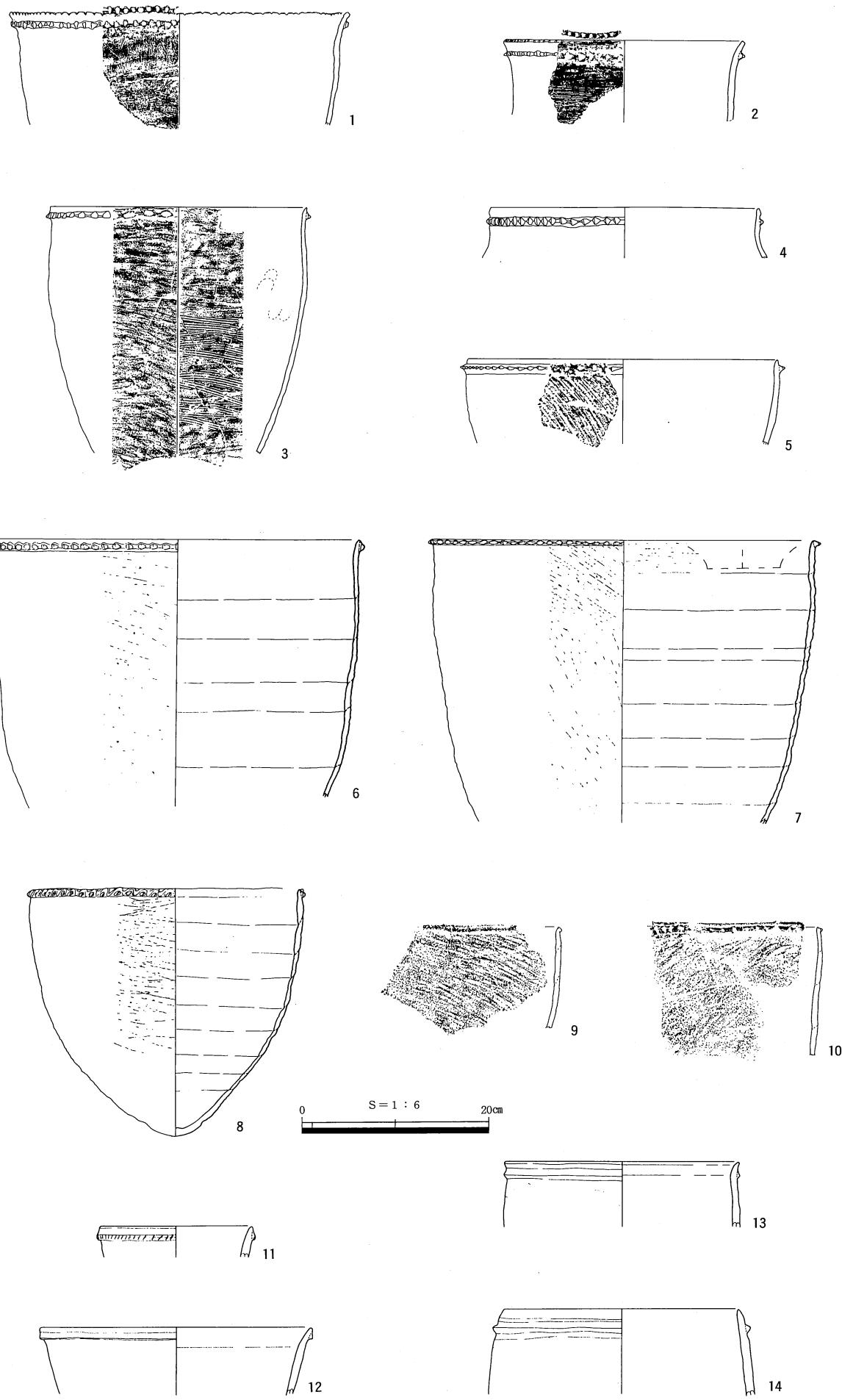
近年、中部瀬戸内地方や近畿地方では、資料の増加に伴い、既存の編年の細分が進められている。鳥取県下でも、発掘調査の増加より比較的良好な資料が徐々に蓄積されてきており、周辺地域の成果⁷⁾を参考にすることで、県下の突帯文土器の変遷を大枠としてたどることも可能と思われる。ここでは、遺跡・遺構単位で資料をとりあげ、各土器群の時間的な位置づけを考える。しかし、甕と浅鉢のセット関係を窺うことのできる一括資料はなく、深鉢にても全形を復元できる資料は依然少ない。以下、甕の口縁部にみられる属性から⁸⁾、当該地域の突帯文土器を4期に大別し概略したい。

[突帯文I期]

近畿地方の滋賀里IV式、中部瀬戸内の前池式に相当する段階である。I期のまとめた資料は少ない。あえてあげるならば桂見遺跡自然河川01出土資料である⁹⁾。土器の特徴は、口縁端部は面取りされ、さらに刻目が施される。刻目突帯が口縁端部から下がった位置にめぐる。また、刻目はD字やO字状にしっかりと施される。器形は第1図1や2のように緩やかに湾曲する。調整は二枚貝条痕が主体を占める。また、晩期中葉から継続する砲弾形の粗製深鉢が伴う。

[突帯文II期]

近畿地方の船橋式、中部瀬戸内の沢田式に相当する段階である。一括性の認められる資料はないが、桂見遺跡包含層資料にII期相当の資料が含まれている¹⁰⁾。砂州上の堆積に包含されていた資料で、一括性にはやや難がある。このうち、I期、III期に相当する資料を差引くことで抽出できるのが、以下の特徴をもつ一群である。特徴は、口縁端部はほとんど面取りされず、刻目も施されない。刻目突帯が口縁端部から下がった位置にめぐり、刻目はD字やO字であるが、I期にくらべるとやや軽く施されたものが多いように思われる（第1図3、4）。器面の調整は、粗い擦痕の残るナデ調整が主体的になり、この段階から砲弾形の突帯文深鉢があらわれる（第1図5）。



第1図 鳥取県内出土の突帯文土器

周辺地域では、二条突帯文土器が出現する段階であるが、鳥取県下では、桂見遺跡包含層資料に客体的なものが1点あるにすぎない。この他に、西伯郡淀江町井出跨遺跡¹¹⁾にも当該期の資料が認められる。

[突帯文Ⅲ期]

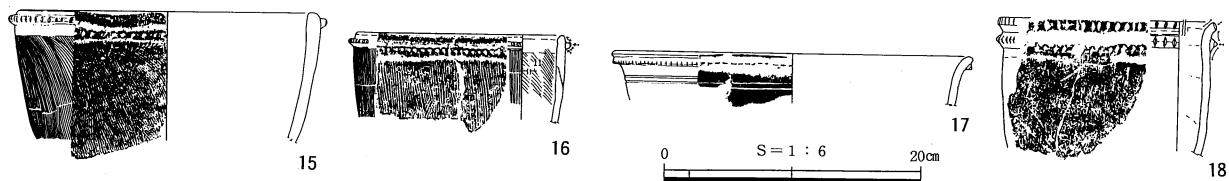
近畿地方の長原式に相当する段階である。古見遺跡出土資料が当該期に相当し、包含層出土ながら一括性の認められる良好な資料である¹²⁾。古海遺跡資料では、口縁端部の調整と突帯の貼りつけが同時に処理されるようになる（第1図6～10）。D字やO字状の刻みも、さらに浅く小さくなり、V字状の刻目が増加する（6～8、10）。また、無刻目突帯が認められるようになる（9）。器面の調整は、粗い擦痕の残るナデ調整が主体的である。器形は砲弾形の深鉢が主体を占めるようになる。近畿地方の長原式では、二条突帯が主流となるが、鳥取県下では、二条突帯文土器は1%以下である。また、古海遺跡に二条突帯は認められなかった。この他に、西伯郡溝口町三部野遺跡¹³⁾、岸本町下ノ原遺跡¹⁴⁾に当該期の資料が認められる。

[弥生時代前期]

かつて、土井珠美氏が検討した長瀬高浜遺跡、イキス遺跡の突帯文土器が当該期に相当する。突帯文系土器ともいべきか。長瀬高浜遺跡の場合、突帯文系土器の多くが包含層からの出土であり、遠賀川系土器をみても時間幅をもつ。包含層出土の遠賀川系土器は南溝手・窪木Ⅱ～Ⅲ期に相当する。イキス遺跡の遠賀川系土器は南溝手・窪木Ⅱ期を中心とした資料群と考えられ、長瀬高浜遺跡とともに大枠では前期中葉に相当する。

一方、突帯文系土器の形態的特徴にみる両遺跡の違いは著しい。長瀬高浜遺跡では、如意形口縁との折衷形や砲弾型で肥厚気味の口縁に突帯がめぐるもののが主体的に認められる。刻目突帯も多く認められ、器面調整にも刷毛目工具が用いられている場合がある（第2図）。イキス遺跡では、無刻目突帯文土器が卓越し98%を占める。目久美遺跡資料でみた無刻目突帯文土器I～IV類が認められる（第1図11～14）。

仮にこれらを長瀬高浜タイプ、イキスタイプと仮称しておく。前者は遠賀川系土器の影響を強く受けた土器で、後者は突帯文土器Ⅲ期から系譜のたどれる一群である¹⁵⁾。そして、長瀬高浜遺跡では後者がほとんど認められないし、イキス遺跡では前者が認められない。小稿では、これ以上、この問題を検討する余裕がないが、当該地域における弥生文化成立期における集落像を考えるうえで2つの突帯文系土器は興味深い事例である。



第2図 鳥取県内出土の突帯文土器2

4. 目久美遺跡出土突帯文土器の時間的位置

先に、第5次調査、第6次調査で出土した突帯文土器を刻目の有無で大別し、さらにそれぞれをI～IV類に4細分した。ここでは、分類した各類の時間的位置についてまとめておく。

先ず、刻目突帯文土器I・II類は縄文時代晩期後葉に位置づけられる。刻目突帯文土器I類にみる口縁端部から下がった位置に突帯がつくという特徴は突帯文Ⅱ期に一般的な様相である。刻目突帯文土器II類は口縁端部の調整と突帯の貼り付けが同時処理されていることから突帯文Ⅲ期に位置づけられる。ただし、ここで示したのは型式学的にみた時間的前後関係であって、目久美遺跡では刻目突帯文土器I・II類が時間的に分離できるものか否かはわからない。

刻目突帯文土器III・IV類については、II類よりも型式学的には後出の一群である。口縁端部から下がった位置に突帯がつくことを重視するならば、突帯文Ⅱ期とⅢ期の過渡的な段階と考えることもできる。しかし、II・III

期の資料が混在する桂見遺跡包含層資料やⅢ期の単純資料である古海遺跡出土資料にこれらが認められないことから、Ⅱ～Ⅲ期の過渡的な土器と考えるよりも、Ⅲ期よりも後出的な土器と考える方が妥当である。

無刻目突帯文土器については、イキス遺跡の状況を参考にすると、そのほとんどが弥生時代前期中葉のものと考えられる。ただし、Ⅲ期・古海遺跡の段階で既に無刻目突帯が出現しており、口縁端部に接して突帯がめぐる無刻目突帯文土器Ⅰ類については、突帯文Ⅲ期にまでさかのぼるものもあるだろう。一方、無刻目突帯文土器Ⅱ～Ⅳ類については、そのほとんどが弥生時代前期に位置づけられる。

また、遠賀川系土器でみる限り目久美遺跡第5次・6次調査で出土した資料には、若干の時間差が認められる。これは、包含層内における偶然の産物ではなく、地点を異にした出土状況に由来する型式差と考えている¹⁶⁾。それでは、これらに伴うと思われる突帯文系土器についても時間的前後関係が看取できるのだろうか。

ここでは、縄文時代晩期末にまでさかのぼる可能性のある刻目突帯文土器Ⅰ・Ⅱ類は除き、第5次調査と第6次調査とを比較した場合、以下の点に差異が見いだせる。第6次調査資料には刻目突帯文土器が含まれないこと、無刻目突帯文Ⅲ・Ⅳ類がみとめられることである。このような差を、特に刻目突帯の有無を時間差と考えるならば、遠賀川系土器で第5次と第6次資料に時間差が認められたように、無刻目突帯が主体的な第6次調査資料の方が一見、新相を示しているかのように思われる。

しかし、第6次調査地点は第5次調査地点よりも山裾から離れた場所で、第5次調査に比べて同じ2次堆積であっても条件が悪い。また、資料の数量的な問題もある。そこで、第6次調査に近接し、より山裾に位置し、包含層を一連の流れで捉えることのできる第4次調査の資料を含め、資料を比較してみたい。

第4次調査では、削出突帯の施された壺なども出土しており、時間幅をもつ中でも第5次調査よりも新しい様相を呈している。しかし、第4次調査で出土した突帯文系土器の内訳は、第6次調査資料ほど無刻目突帯が主体的でないどころか、無刻目突帯文土器の増加を重視するのであれば、第4次調査のほうが刻目突帯文の比率は大きいのである。つまり、遠賀川系土器に認められる差ほどに、突帯文系土器からは時間的前後関係を読みとることはできない。このことについては、今後、遺構内一括資料をもって検討すべき課題であろう。

5. 突帯文系土器と遠賀川系土器

鳥取県下における晩期終末から弥生時代前期にかけての突帯文土器に特徴的なのは、突帯に刻目を施さない無刻目突帯文土器が増加することである。Ⅲ期の古海遺跡、弥生時代前期のイキス遺跡の突帯文土器を甕について比較した場合、古海遺跡18%に対し、イキス遺跡は98%を無刻目突帯文土器が占める。古海遺跡からイキス遺跡の突帯文土器という変遷の連續性については、なお資料の増加をまって慎重に検討する必要性がある。しかし、無刻目突帯文土器の増加に着目するならば、弥生文化の受容およびその定着により、在地土器（突帯文土器）に現れた変化は劇的である。そして、弥生文化との接触により成立した無刻目突帯文土器は、既に弥生土器であり、突帯文系土器という方が妥当かもしれない¹⁷⁾。以下、弥生前期の器種組成に含まれる突帯文土器を突帯文系土器と称す。

第1表 突帯文土器（甕形土器）における刻目突帯の比率

| 遺 跡 名 | 刻 目 | 無刻目 | 総点数 |
|-----------|-------|---------|-------|
| 古 海 遺 跡 | 8 2 % | 1 8 % | 5 0 点 |
| イ キ ス 遺 跡 | 2 % | 9 8 % | 5 7 点 |
| 目 久 美 5 次 | 1 1 % | 8 9 % | 9 4 点 |
| 目 久 美 6 次 | 0 % | 1 0 0 % | 1 3 点 |
| 目 久 美 4 次 | 3 7 % | 6 3 % | 2 4 点 |

目久美遺跡の場合、刻目突帯文土器Ⅲ・Ⅳ類、無刻目突帯文土器Ⅰ～Ⅳ類について弥生前期の遠賀川系土器に伴う可能性を指摘した。この場合、刻目突帯文土器と無刻目突帯文土器の比率は、第5次調査で刻目11%、無刻目89%、第6次調査で無刻目100%となる¹⁸⁾。ほぼ同時期と考えられるイキス遺跡での突帯文系土器の在り方と大差ない。一方、長瀬タイプの土器は両調査でもほとんど出土していない。如意形口縁との折衷形の第16図119や口縁端部を面取りする117をわずかに長瀬タイプとしてあげができる程度である。この点でも、イキス遺跡との共通性が指摘できる。

また、目久美遺跡の突帯文系土器と遠賀川系土器を製作技法で比較してみたい。接合痕が観察できるものから判断すると、遠賀川系土器が外傾接合であるのに対し、突帯文系土器は内傾接合を基本とする。調整においては、遠賀川系土器は刷毛目ないしナデを基本とするが、突帯文系土器は粗い擦痕の残るナデまたはナデ調整を基本とする。このように、製作技法上の共通点はほとんど見いだせない。これに対し、長瀬高浜遺跡の突帯文土器には刷毛目、外傾接合が認められる。

そして、イキスタイプの突帯文土器を有する遺跡は、目久美第5次・6次調査に限らず、島根県北講武氏元遺跡¹⁹⁾でもイキス・目久美同様の突帯文系土器が半数を占めている。このような状況こそが、突帯文土器から系譜のたどれるイキスタイプの突帯文系土器を有する遺跡における特徴であり、山陰地方の地域色のひとつとを考えることができる。そして、突帯文系土器に縄文的な伝統を色濃く残す遺跡と、長瀬高浜遺跡のように刷毛目調整を取り入れた突帯文系土器が遠賀川系土器に伴う遺跡の存在は、山陰地方における弥生文化の受容を考えるうえで興味深い。

ところで、突帯文系土器はいつ頃まで土器組成の中に認められるのだろうか。貼付突帯や多条沈線、口縁逆L字形の甕が出現する前期後葉になると、西伯耆では小規模な環濠集落が認められるようになる。西伯郡淀江町今津岸の上遺跡、西伯町清水谷遺跡等の環濠内からは、前期後葉の土器が多量に出土している。しかし、これらに伴う突帯文系土器は報告されていない。このことから、前期後葉には突帯文系土器は当該地域から姿を消すことが想定できる。

また、目久美遺跡第5次・6次調査では、遠賀川系土器や突帯文系土器に伴って粗製土器が出土している。晩期中葉などにみられる深鉢形土器を考えることもできるが、器形的にも異なるし、晩期中葉に比定できるような浅鉢なども認められない。また、土器の調整などが、突帯文系土器と共通することから、粗製土器についても弥生時代前期中葉における縄文系土器のバリエーションとして理解したい。

6. おわりに

鳥取県下のまとまった弥生前期の資料として現状で古く位置づけることのできるは、長瀬高浜遺跡SI71、SI156、イキス遺跡、目久美遺跡第5次調査資料等である。これらに先行する資料群について島根県に目を移すと、山陰最古の弥生前期土器として古くより知られる遺跡に島根県大社町原山遺跡がある。出雲原山式土器として鑑定される一群は、板付I式に相当する古相を示すものを含むという。仮に、この一群を古くみるなら、中部瀬戸内では、岡山県津島遺跡とほぼ併行関係にある。そして、これらは、小稿で設定した突帯文Ⅲ期と併行関係にあるだろう。

中部瀬戸内では長原式に併行する段階の突帯文土器は認められていない。しかし、島根県東部では、原山遺跡と同時に、突帯文Ⅲ期の土器を使用する遺跡が存在する²⁰⁾。そして、興味深いのは、原山遺跡出土資料には、これまで突帯文土器が報告されていないことである。今後の資料の増加を待つ必要があるが、このことを現状で積極的に評価するなら、原山遺跡は在地の要素をほとんどもたない外来的要素の強い遺跡で、山陰地方において早い段階に点的に存在した弥生集落であることを示しているのかもしれない。

また、長瀬高浜遺跡とイキス・目久美遺跡のような異なる系統の突帯文系土器の存在を考慮するなら、山陰地方東部における出現期の弥生集落に、異なる社会的背景が存在したことを想定することも可能である。しかし、土器にあらわれた一側面を強調するだけで説明できる問題ではなく、今後、遺物・遺構も含め多角的な検討を積

み重ねていかねばならない。

山陰地方における縄文時代晚期から弥生時代前期にかかる問題の多くは未整理の状態である。また、鳥取県下においては前期弥生土器の編年について見直しの時期にきているように思われる。個々の資料がどこに位置づけられるかではなく、遺構単位もしくは遺跡単位のまとまりとして資料を見直す必要があろう。小稿では、目久美遺跡出土資料を中心に鳥取県下の資料について私見を述べたが、今後は、鳥取、島根という枠にとらわれるのでなく、山陰という地域で広く当該期の問題を検討していかなければならないことを痛感する。

最後になりますが、資料の実見にさいし、赤沢秀則氏、谷口恭子氏、杉村和祐氏、根鈴輝雄氏のお世話になりました。また、平川誠氏には古海遺跡について御教示いただきました。記して感謝申し上げます。 (濱田)

- 1) 清水真一 1992 「因幡・伯耆」『弥生土器の様式と編年 山陽・山陰編』木耳社
- 2) 野島珠美 1983 「第Ⅲ章遺物第1節遺構外出土の縄文土器・弥生土器」『長瀬高浜遺跡発掘調査報告書Ⅳ』鳥取県教育文科財団
土井珠美 1989 「6. 弥生時代の遺物」『北面遺跡群イキス遺跡発掘調査報告書』倉吉市教育委員会
- 3) 弥生土器と突帯文土器の共伴という問題を考えるとき、弥生化した突帯文土器を弥生土器と共に扱うのは不適当である。中村健二1993「近畿地方における凸帯文土器資料の現状」『突帯土器から条痕文土器へ—伊勢湾周辺地域における縄文文化の解体と弥生文化の始まり—』。そのためにも、鳥取県下では突帯文土器単純期の様相を把握するとともに、弥生化した突帯文土器を理解する必要がある。
- 4) 一方では、不正形な甕を壺と誤認している可能性もある。
- 5) ここでは、縄文土器の可能性がある第4章第49図11をのぞいた。
- 6) 久保恵里子 1997 「第3節 弥生時代前期の土器について」『窪木遺跡 I 岡山県立大学建設に伴う発掘Ⅲ』岡山県教育委員会
- 7) 家根祥多 1981 「近畿地方の土器」『縄文時代の研究』4 雄山閣
平井 勝 1988 「岡山における縄文晚期突帯文土器の様相」『古代吉備』第10集
- 8) 本節では、家根祥多氏が近畿地方の突帯文土器研究で示した型式学的変遷を大筋での基本とする。
- 9) 牧本哲雄ほか 1996 『桂見遺跡—八ツ割地区・堤谷東地区・堤谷西地区—』鳥取教育文化財団
- 10) 9同じ
- 11) 太田正康ほか 1993 『井手脇遺跡』鳥取県教育文化財団
- 12) 平川誠 1981 『古海遺跡発掘調査概報』鳥取市教育委員会
- 13) 益田晃ほか 1990 『三部野遺跡発掘調査報告書』溝口町教育委員会
- 14) 赤見高好 1997 『岸本下ノ原遺跡発掘調査報告書』岸本町教育委員会
- 15) 突帯文Ⅲ期の土器からイキスタイルの間に1型式程度のヒアタスが存在しているものと思われる。しかし、Ⅲ期イキスタイルの間に越敷山遺跡群土坑資料を介在させることで、ヒアタスが少しばかり埋まるものと考えている。このような突帯文土器の変遷については別の機会にあらためて整理を試みたい。
- 16) 本来、第5次調査地東側には小丘陵があったことが過去の航空写真などに記録されている。集落が丘陵および丘陵裾部等の微高地に営まれていたであろうことは想像に難くない。第5次、6次における弥生土器は、同じ黒色粘土層から出土しているが、ここに包含されている遺物は、第5次調査地点ではかつてあった小丘陵付近からの2次堆積、第6次調査地点では独立小丘陵足尾山側からの2次堆積を中心としていると思われる。このことから、両調査地点の出土遺物に時間差が認められることも、偶然ではなく、地点差として理解したい。

- 17) 無刻目突帯文に限るわけではないことを断つておく。刻目突帯文土器であっても、刻目突帯文土器Ⅱ類・Ⅲ類については突帯文系土器と考える。今後、調査時における出土状況をいかに把握するかも重要である。
- 18) ここでは縄文時代晚期、突帯文Ⅱ・Ⅲ期にさかのぼる可能性のある刻目突帯文土器Ⅰ・Ⅱ類を除いている。
- 19) 赤沢秀則 1989 『講武地区県営圃場整備事業発掘調査報告書4 北講武氏元遺跡』鹿島町教育委員会
- 20) 島根県東部では、松江市石台遺跡、タテチヨウ遺跡、西川津遺跡などで突帯文Ⅲ期の資料が出土している。また、石台遺跡では、突帯文Ⅲ期の土坑から、糊圧痕のある土器片が出土している。この土坑内一括資料には、遠賀川系土器は報告されていない。つまり、在地の突帯文土器を使用する集団においても、突帯文Ⅲ期には既に稻作が開始されていた可能性は十分に考えられる。

おわりに

2年間、ご支援いただいた多くの方々に、御礼を申し上げます。未熟な調査、拙い報告ではありますが、ここに調査報告書をまとめることができたのは、多くの方々に支えられてきたからにほかなりません。

実のところ、調査を始めてから、それ以前にまして、しだいに低湿地遺跡を調査することの難しさを感じ始めました。洪水堆積をみて、なんと複雑な堆積だろうと戸惑う日々が続きました。幸運にも、徳岡隆夫先生をはじめとする自然科学関係の諸先生方からご協力を得て、目標としていた縄文層までの調査を何とか終えることができました。低地の遺跡調査において、地質学的検討から得ることのできる事実がいかに多いことか。その重要性を痛感しました。

そして、井上貴央先生には、ご多忙のところ、動物遺存体、石材について御教示していただきました。にもかかわらず、調査員の力量不足から、今回の報告では、目久美遺跡を考える上で重要な石器、石材について、十分な報告、検討を加えることができませんでした。この問題につきましては、今後の課題とさせていただくことをご容赦願えれば幸いです。

明記させていただかなければならぬ方は、幾多もいらっしゃいますが、紙面の都合によるご無礼を平にご容赦願います。また、最後になりますが、暑い夏、寒い冬にも発掘作業に従事してくださった作業員の方々、無理な注文も冗談ひとつで引き受けてくださった整理員の方々に感謝申し上げます。

1998年3月麗日